木田市長の どんとコミュニケーション

～真珠のように輝くまちづくりのために～

朋（友）あり

Vol.89

「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」孔子の有名なことばです。実際にこのことばを友達から言われると、本当に嬉しいものです。

先日、東海市長会の総会が静岡市でありました。私には若い頃、派米農業研修で一緒に渡米した友人が全国にたくさんいますが、静岡市にもその時の友人がいて、一夜、夕食を共にしました。ほろ酔いかげんになった時、そのS君が、前述の孔子のこのことばを発しました。

S君は事業を起こし、割合順調に仕事がまわっているようです。今は外車に乗ったり、別荘を購入したりと恵まれた状態の彼も、40年前の研修生時代は厳しく、かつ面白い経験を多く重ねたようです。アリゾナの炎熱地帯で、クルマのボンネットの上に卵を割ると、目玉焼きができると言われるような熱い中、毎日毎日、畑仕事をつづけました。そのS君がある朝目覚めると、片方の腕がパンパンにはれあがっていたそうです。その前の晩に、ベッドの中で腕にチクリとした痛みを感じました。最初は裁縫をしていた友人が針でもしまい忘れたのかなという程度に、気にもとめませんでした。しかし、その後吐き気におそわれ、トイレへ行き、またベッドにもぐりこんで眠ったそうです。そして翌朝には、腕がはれあがっていたというわけです。そのはれあがった腕で苦労して、一日の仕事を終えて帰ったあと、ベッドの中で圧死しているサソリを見つけました。その時はじめて、昨夜サソリに刺されたことに気づいたわけです。びっくりしたS君が農場主に訴えたところ、「もう今さら手遅れだよ」と言われたそうです。大きな赤いサソリだったから良かったが、もしそれが小さな黒いタイプのサソリだったら、S君の命はなかったそうです。

柑橘の専攻生たちは、その多くがアリゾナ州に配属され、彼らは今でもサソリ会という名の同窓会を結成して交流しています。サソリに刺されるという経験は、日本人の中ではほとんどないでしょう。その経験のあるS君は、きっとサソリ会のメンバーの中でも特別な会員であろうと思います。

S君に限らず、研修生たちは、異国の地で若者しかできないようなつらい仕事をしたり、なかなか経験できないような体験を重ねたはずです。そんな体験のつみ重ねが現在の彼の仕事っぷりに生きているなと感じました。

今月は肩のこらないコラムにしてみました。

宮城県南三陸町から

派遣職員　松岡孝治

4月1日より一年間、行政支援として南三陸町へ派遣されています。

被災直後の平成23年7月に一か月の短期派遣を経験しましたが、約一年半ぶりに南三陸町へ戻ってきて、一番最初に感じた印象は「復興はこれから」という一言でした。

今回、南三陸町の企画課に配属となったわたしの主な仕事は、「協働のまちづくりに関すること」「NPOとの連携など」「地区集会施設の整備」など、被災したコミュニティをソフト・ハードの両面で新たに創りあげていくことです。

同じ部署には、長崎県、鹿児島県、神奈川県からの派遣職員もおり、刺激を受けながら仕事をしています。

鳥羽市で働いていると、被災地の「復興」や「まちづくり」は、ずいぶんと進んでいるように思われがちですが、実際は、住まいを高台に移転をするための宅地の造成作業が始まったばかりです。震災以前の「普通の暮らし」に戻るまでには、まだまだ時間がかかると感じています。実際に足を運び、自分の目で確かめてみることが大切だと改めて思いました。

復興の道のりは、まだまだ長く、被災したコミュニティを新たに創ることは大変なことですが、鳥羽市代表として、復興の一翼を担うべく頑張ります。

南三陸町役場仮設庁舎